

The Gallery voice NO-71

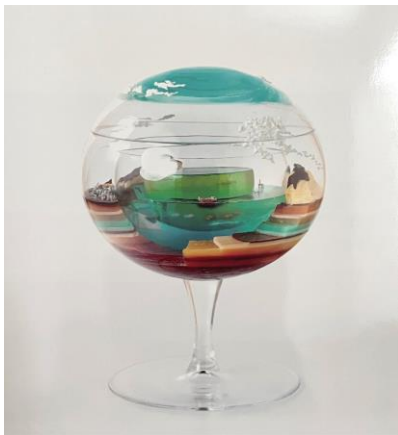
編集・発行／画廊沖縄 〒901-1114 沖縄県南風原町神里 373 番地／TEL (098)888-6117 / 2024.3.6
Gallery Okinawa / 373 Kamizato Haebarucho Okinawa Japan galleryokinawa.com

概念に囚われないビックな作家

森根 聖美

私が初めて勇賢さんを知ったのは、2004年「沖縄国際大学へリ墜落現場をピザボックスに描く写生大会」の新聞記事でした。その後、パブロという喫茶店で行われたお話会で、作品を紹介する勇賢さんに偶然出逢いました。オスプレイを紅型の着物に仕立てた「結い、You-I」、捨てられる紙袋で美しい木を創り出した「告知-森」、ドル紙幣を立体的にカットした「Cut Up Price」どれも私の美術の概念を覆すもので、ハンマーでポンと頭を叩かれたような衝撃を受けました。「この人は現代のピカソだ」とその時本気で思ったのです。

勇賢さんの作品はどれも美しく、眺めていると違う世界に誘われる楽しさやワクワク感があります。一方、作品に対する思いや考えを語るときは、哲学的で難解な言葉が飛び出すので難しく、理解できないと私に分かる言葉で丁寧に説明してくれました。質問にはいつも分かりやすく解説してくれるので、私もひとつひとつの作品を理解しようと話された言葉を記録しました。



「Dessert Project」 2000年

私は作品の中で特にワイングラスに地殻や海や空を描いたドローイングが好きで、作品について質問したことがあります。答えはこうでした。「パフェって地層みたいじゃないですか。今ある世界の決まり事、考え方って箱にはめていってる感じですよ。このパフェの容器の中にそれを詰めてみた。下の方にはブルーベリーやクランベリーがあって地層がチョコみたいになって、いちごジャムみたいなのがあ

ってシリアルがあって、空と宇宙と海と地球、今までこうだと信じていたことが、容器が壊れてしまったら違うことが起こるかもしれない。」今までの概念に囚われない自由な発想が、作品を生み出す原動力になっているんだと感じました。

2008年品川の実美術館で海外の数名のアーティストとグループ展がありました。勇賢さんは、壁に突き刺さったナイフにオオゴマダラのさなぎをつけたインスタレーションを発表していて、衝撃と同時に、胸の奥がスーッとするような爽快感を味わったのを今でも鮮明に覚えています。オープニングイベントの中で、観客と一緒に作品鑑賞しながら作家さんが作品について話してくれるというものがありました。あるドイツ人アーティストは話をされるのが苦手だったのか、時折言葉を詰まらせていました。



「コーラスの習作」 2023年

その後その方が庭の奥でしゃがみ込んでいると、勇賢さんは彼に駆け寄り、長い時間何かを話しかけていました。勇賢さんの優しさを垣間見る出来事でした。

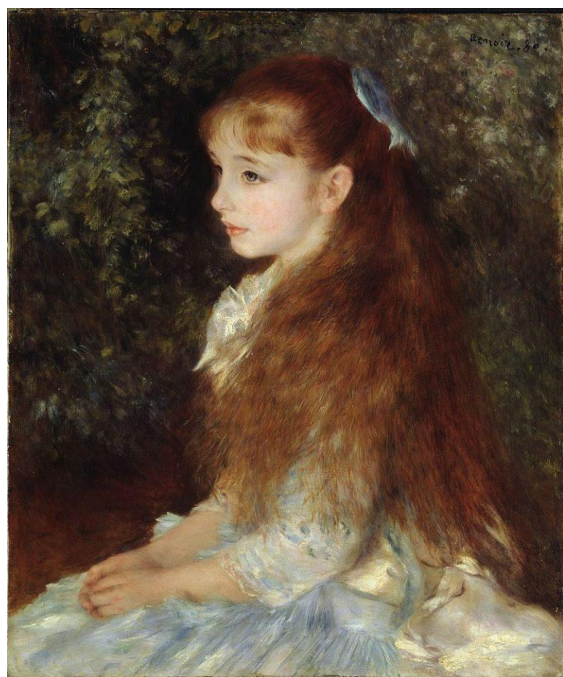
勇賢さんは私のような者にも、この作品どうですか？ どう思いますか？ と問いかけてくれます。ビックな作家なのに私に意見を求める事に驚きと感動を覚え、人として価値を認められていると感じます。誰でも自由に生きたいのです。みんながアートで繋がり、自由に表現できると信じたいのです。誰もが「HOPE」を胸に抱き、街を闊歩できる日が来る事を。

(もりね まさみ/美術工芸愛好家)

さよなら美術・EXIT

當山 忠

1998年11月、先輩諸氏が企画したニューヨークの旅に、お邪魔で参加させてもらったことがある。滞在中、単独行動の機会を利用してマンハッタンに点在する美術館を歩き回った。そこでふたつの作品を通して美術とはなにか、考えさせられたことがある。これまで頭ではわかっていたつもりの美術作品の理解が、はっきりとわたしを打ちのめしたのだ。作品は両方ともグッゲンハイム美術館に収蔵されていて、1階に展示されていたのが名作ルノアールの『少女』。そして最上階に「置かれていた」のがデュシャンの『泉』である。



「可愛いイレーヌ」オーギュスト・ルノワール 1880年

最初、『少女』を目の前にしたときはその作品特有の重厚なマチエールに、まずもって圧倒された。そのあと、作品みずからが「私は芸術ですか？」と鑑賞者に問うような『泉』に遭遇したのである。『泉』の傍を驚きながら憤然として通りすぎて行った老婦人の顔が忘れられない。デュシャンは「目から得られる刺激を楽しむ網膜的絵画」という芸術のありように異を唱えていた。それも大正時代の初期のころからだ。

デュシャンは『泉』で、わたしたちになにを言おうとしていたのか。デュシャンは、わたしたちの目の前にある「もの」が一緒くたに同じ名前の「もの」として扱われることに異論を申し立てていたのだ。

たとえば、比嘉さん宅のトイレにある「便器」と

東風平さん宅にあるその「便器」は同じものか。もちろん両方とも同じ商品構造・番号ということもあるだろう。だが近代の産業革命以降、大量生産と資本拡充主義のなかで「便器」は大量に売るために全てが同じ「便器」という名で呼ばなければならなかった。わたしたちは「便器」を「便器」として全体化のなかで同じ「便器」として呼ばざるを得なくなっている。

商品以外で言えば、たとえば名護の寒緋桜も南部の個人宅の庭に咲く寒緋桜も、みんな同じ「寒緋桜」として呼んでいる。だが名護の寒緋桜は名護に咲く寒緋桜であり、南部の喜屋武家の庭に咲く寒緋桜は喜屋武さんの寒緋桜である。「便器」も「寒緋桜」もほんとうは「便器」でもなく「寒緋桜」でもない。わたしたちだけの経験のなかで育まれてきた思いで深い「対象たち」なのだ。誰もが小さいころ、おしっこで汚した特別な「便器」であり、あなたが初デートで桜を見に行つときの特別な「寒緋桜」なのだ。わたしたちは、全体化や集列化のなかで「便器」や「寒緋桜」と呼ぶように飼い馴らされてきている。流通化や全体化のなかで「便器」や「寒緋桜」と呼ばねばならないのだ。



「泉」マルセル・デュシャン 1917年

集合化に媚を売るような芸術では現実世界を捉えることはできない。結局「美術」は負けたのだ。ロックもジャズも演劇も文学も同じことだ。いま世界は「ならずものの権力者」たちによって蹂躪されっぱなしだ。「わが美術」も、そんな世界に手をこまねいているだけだ。この国もまだかすかに薄暗くはあ

るはずだが、真っ暗な闇はそこまで近づいている。
(とうやま ただし/編集工房アドリヴ)

心を掴まれた中国青磁

松田 達

我々世代は、やちむん（陶器）と言えば沖展会場の壺屋小学校での熱気溢れた時代が蘇るが、陶器への関心がより深まったのは中国で名品を観たことから扉が開いた。

1992年は日中国交正常化20年、沖縄の日本復帰20年の年だった。その節目の年に中国を舞台にした事業に関わった。その事業とは「中国大陸3000キロ踏査行一甦る進貢使路」というもので、琉球王国時代500年に及んだ冊封・進貢の使路を沖縄の青年たちに体現させようとする壮大な試みだった。

事前調査のため浙江省杭州に訪れたが当地の役人に南宋官窯博物館に案内された時のことである。何の変哲もないような規模の博物館だったがいろいろな展観するうちある陶磁の美しさに息をのむほどの衝撃を受けた。

蒐集家のあいだでは宋代（960～1279年）の青磁の熱狂的なファンがいて考証も進んでいることは伝え聞いていたが初めて実物を経験した。その青磁は高さ30cm位のほっそりとした酒器であった。南宋時代の名器で玉壺春瓶（ぎょこしゅんへい）、と同行者が耳打ちした。究極の美しいものは人を黙らせるという。私は初めてその出会いに立ちつくした。ここで資料から玉壺春瓶を紹介していただくことにする。

くほっそりとした頸（くび）から流れるように美しい曲線を描き、豊かに膨らんでゆく胴体は均整がとれ、器の表面を覆う釉薬は青と緑を基調として美しい色合いをもち雨上がりのみずみずしい空の色に例えられ、雨過天青と称される。

その日の感動は抑えがたく翌日も足を運んだ。2日間も観続けたので、どうしてこのような名品がこの世に現われたのか、興味が湧いてきた。想像するに名もない陶工たちが幾世の長きにわたり技を相伝として受け継ぎ、試行錯誤を繰り返し、土、ろくろ、釉、窯の工程が完璧に仕上がり、さらに偶然と偶然が重なり合い生まれたであろうと思った。

それから数年後のこと、中国の知人から陶片をいただいた。南宗時代の青磁のかけらのようだ。出元を尋ねると博物館からのものと言う。これには驚いた。現代の中国とは違い当時は貧困社会でみんな喘いでいた。博物館の職員も小遣い稼ぎに精を出すゆるやかな時代だったようだ。

陶片は考古学、陶工が土味、釉薬陶技を学ぶために関心を持つものだと思っていたが、さにあらず、一般の陶片ファンはかけらから想像力で余白を埋め完品をイメージできる夢の世界だという。なるほど名品が手に入ったような妙な気分になるかもしれない

のだ。名器まつわる物語も山とあるようだ。

心を掴まれた中国の出来事からその後、沖縄の古陶の魅力に傾倒していった。沖縄の自然と美意識から生まれるものは誇らしく尊い、もっと評価を高めてもらいたいと思う。

時は移りサラリーマン生活も終盤に入ったころ、大阪への転勤になった。陶磁ファンにとって、大坂、京都は名品、逸品が集まる垂涎の地、小躍りした。大阪生活にやっと馴染んだころ、いよいよ動くことにしたが、事にのぞみ目標をたてたモノ（骨董品）は買わない。もっとも値を聞くととても手が出せないのである。気に入った陶磁は、何度も繰り返し見続け、心に伝わるまで観る訓練をしていった。単純なようでも大切な鑑賞方法になった。



「玉壺春瓶」青磁・中国南宋時代

多くの名だたる美術館、博物館を廻りそれぞれの分野に特化した世界に感銘を受けたが、東洋陶磁美術館が全てにおいて他を圧倒していると思えた。同館は東洋陶磁コレクションとして世界一級の質、量を誇り、展示、研究の一大拠点として評価されていた。陶磁に関心がある人なら是非訪ねて欲しい所である。以後、私の鑑賞、学習の場となり多くを学んだ。

富裕層がひしめく骨董街の世界にたじろぎ、ひるみ、尻込みし、冷やせを掻きながらもうまい具合に楽しんだ。

あの出会いから30年余り、当時の中国と日本の友好ムードは遠い過去となったようだ。ただ、私にとって、玉壺春瓶の透き通っていて深い青の記憶はかわらないままである。（まつだ たつ）

第27回美術オークション作品一覧

The Gallery Voice No-71. 2024.3.6 画廊沖縄

No.	作品画像	作家名	タイトル	No.	作品画像	作家名	タイトル
1		下地寛清	朝焼散象	23		山田真山	達磨の図
2		岸本一夫	裸婦	24		玉那覇有公	絹地海老魚文 蟹文紅型
3		玉城栄一	踊り子	25		高瀬三郎	阿蘇山(熊本)
4		名渡山愛擴	パンジー	26		当真裕爾	龍巻 アイスボール
5		玉那覇正吉	むくげ	27		当真裕爾	龍巻 酒壺
6		山之端一博	森の風	28		稲嶺盛吉	琉球ガラス 酒器セット
7		稲嶺盛吉	琉球ガラス 花器(大)	29		宮城須美子	魚文 掻き落とし壺
8		稲嶺盛吉	琉球ガラス 花器(小)	30		儀間比呂志	旗頭
9		稲嶺盛吉	琉球ガラス 大皿	31		城間栄順	魚
10		稲嶺盛吉	琉球ガラス 中皿(グリーン)	32		一宮侑	水滴
11		稲嶺盛吉	琉球ガラス 中皿(ブルー)	33		小橋川源慶	飴釉丁字風炉
12		稲嶺盛吉	琉球ガラス グリーン皿2個セット	34		豊平ヨシオ	
13		平良晃	風景	35		アンディ ウォーホル	マリリンモンロー Sunday B Morning
14		雲石	寿	36		丁紹光	Dance of the Peacock
15		玉那覇有公	海老	37		マリー ローランサン	母と娘
16		小橋川永昌	赤絵草花文 花器	38		平良晃	夏の風景
17		小橋川源慶	緑釉大壺	39		宮城健盛	風景
18		玉那覇有公	紅型暖簾	40		儀間比呂志	首里城
19		照屋勇賢	コーラスの習作	41		具志堅聖児	
20		金城次郎	魚文徳利 ぐい呑セット	42		武田浪	酒器と皿
21		兼城賢章	鳥と女	43		大山忠作	松鯉
22		佐田勝	デイゴ咲く沖縄				